

2007年2月20日

2002FIFA ワールドカップ™記念 日本サッカーミュージアム
第9回「アドバイザリーボード」の概要報告

2002FIFA ワールドカップ™記念 日本サッカーミュージアムのアドバイザリーボードは、2007年2月19日(月)の14時より16時まで、JFAハウス3階ラウンジにおいて、第9回目の会合を開催した。

アドバイザリーボード委員 出席者

遠藤安彦、大住良之、木村剛、木元教子、平野哲行、真野響子

日本サッカーミュージアム

岡野俊一郎(館長)

小野沢洋(JFAミュージアム部部長)、津内香(JFAミュージアム部)

アドバイザリーボード委員 欠席者

石井幹子、民秋史也、二宮清純、日比野克彦

館長挨拶

出席者に対してのお礼と、本年もより一層活発なアドバイスをいただきたいとの言葉があり、座長である木村剛氏に進行をお任せする旨の挨拶があった。

事務局より、資料1にもとづき、入場者数、特別来客、運営、展示、イベント関連、パブリシティなどについて報告を行った。

- ・ 1月24日の入場者数18名は開館以来最低の数字であった。
- ・ この3年間で、1月の成人の日以降は入場者数が最も落ち込む時期であることが確認された。2月になると修学旅行や総合学習など学校関係の訪問が増え、入場者も増加傾向にある。そのため、今後は、成人の日以降の時期について、メンテナンス休館等も考慮したい。
- ・ 特別来客としては、2010年のワールドカップを開催する南アフリカ共和国の関係者が、大会開催の参考として、3ヶ月に1度程度の割合で訪れている。12月6日は外務大臣一行が訪れた。
- ・ 12月はFIFAクラブワールドカップジャパン2006の関係で各国からの訪問があった。
- ・ 運営面に関しては、開館から3年が経過し、機器の経年劣化による不具合や照明電球切れが多発している。
- ・ 展示については、FIFAクラブワールドカップジャパン2006におけるトロフィーの再

- 展示、モルテンによるサッカーボールの説明シートの貼付、「こころのプロジェクト」によるロナウジーニョ選手のメッセージ展示、臨場館のコンテンツの追加、トゥーリオ選手の足型設置などを行った。
- ・ また、波多江輝子さんの1960年代からの収集物、川本章夫氏より故川本泰三氏着用のベルリンオリンピックユニフォーム、篠島春枝さんより故篠島秀雄氏着用の東京帝国大学のセーター等の寄贈があった。
 - ・ 歴代のユニフォームについては、現在東京オリンピック大会のものが未収集であり、所有されている方を探している。ただし当時はユニフォームを使いまわしていたこともあり、簡単ではないと思われる。
 - ・ 2月17日には第3回目となるミュージアムウェディングが行われた。これは、東京ガーデンパレスホテルの企画で、ミュージアムとしてはヴァーチャルスタジアムの場所を提供している。
 - ・ ヴァーチャルスタジアムにて、日本フットサルリーグ正式名称記者会見、2007Jリーグ日程発表記者会見、2007日本代表日程発表記者会見などを行った。今後も各種記者会見の予定が入っている。
 - ・ 日本経済新聞首都圏版やBSデジタル放送5局共同編成番組などいくつかの取材を受け、パブリシティを行っている。現在は、湯島天満宮「梅まつり」に案内看板を設置している。
 - ・ 1月20日にJFA アカデミー福島の特別プログラムにて、カップ、トロフィーの参考資料を提供した。
 - ・ 2月27日にヴァーチャルスタジアムでびあ主催による「びあトークバトル」が予定されている。
 - ・ JFA2005宣言(2005年1月1日制定)を基づいた事務局にて策定の「業務プラン2008」23項目のうち、「18.日本サッカーミュージアム」を検証し、新たな業務プランをJFA事務局内(ミュージアム部を中心に他関連部署)にて策定することとなった。

(その他、資料1参照)

続いて、事務局より、資料2に基づき、日本サッカーミュージアム平成19(2007)年度予算案の説明を行った。主なポイントは以下の通りである。

- ・ 開館から3年が経ち、機器類に経年劣化が予想されるため、メンテナンス費用を昨年度の倍額である6百万円を計上する。
- ・ ヴァーチャルスタジアムはジーコジャパンを扱った2作品を1本に編集。非メガヴィジョンのAFCフットサル選手権等の撮影・公開も考慮中。非メガヴィジョンのため費用は安くなるが、AFC等の権利関係をクリアする必要がある。ヴァーチャルスタ

ジウム予算のうち、保守メンテナンスに約 15,000,000 円、編集等に約 7,000,000 円の予定である。

- ・ 「サポーターと語る」他ヴァーチャルスタジアムを使用した公開インタビュー収録のための主催イベント費を計上する。
- ・ 日本サッカー殿堂は、今年度より年 1 回（9 月 10 日が式典）となる。
- ・ ショップ収入を毎月 20 万円アップで考えており、今年度は 1,500 万円を超える収入を見込んでいる。
- ・ 以上から、記念事業補助金には 9 億 8,500 万円を申請した。

事務局からの報告を受け、予算案及び企画・運営について、以下のような質問と意見をいただいた。（「 」部分は事務局よる回答）予算案資料について、岡野館長より、昨年度の実績を載せて、比較できる形にすべきとの指摘があった。

- ・ 殿堂委員会は JFA 管轄のものでありながら、予算を計上するのはミュージアムか？
ミュージアム = ミュージアム部（JFA 内の組織）であるため、そのようになっている。

これについて、遠藤委員より、本来は委託費のような形になるべきであるが、いずれ記念事業補助金がなくなれば JFA に移行するものである。また、殿堂の決定自体はミュージアムではできないものである、との説明が加えられた。

- ・ 殿堂ゾーンが少し暗いのではないか。全体のデザインやレリーフについて再考の余地がある。もう少し魅力的な、人格があらわれるようなものにすべきである。例えば若手彫刻家に彫ってもらおうというのはいかがでしょうか？
- ・ ショップの賃貸料は何パーセントか？
ショップの売上の 12%の契約となっている。ただし、取り決めにより年間の収入が 8,000 万円を超えると 15%になり、その年度をさかのぼって追加計上される。現在は、来年度に向けた新しい契約の交渉中である。ショップ関係の収入では、その他ジェイリーグエンタープライズからのロイヤルティ料がある。
- ・ ミュージアム独自のものの売上はどの程度か？
全体の 5%以下。将来的に、ここでしか買えないものと一般流通できるものを分けて売り出していきたい。11+の周知徹底を行いたい。
- ・ ベルリンオリンピックの手ぬぐいのレプリカを製作・販売してはどうか？同じデザインで、タオルやバスマットも商品としてよい。東京ガスの関連会社が運営しているコンランショップなども参考になる。
- ・ 美術館のオリジナルグッズは一般によく売れているようだ。例えば、金沢 21 世紀美

- 術館では、オリジナル商品だけで年間 7,000 万円を売り上げている。ここでは、伝統工芸作家とのコラボレーションの商品も多く、今後の参考になると思われる。
- ・ アディダスとジェイリーグエンタープライズだけでよいのか？他の活路も考えてもよいのではないか。
 - ・ 運営スタッフをボランティアにした方がよいのではないか。
業務が JFA ハウスの管理業務と一緒にしているところもあり、スケールメリットを考慮している。以前にも同様の指摘を受け、運営スタッフ費についてはかなり減額している。
 - ・ ヴァーチャルスタジアムの新規コンテンツとしてアジアカップを追加する予定は？
会場が、ベトナム、インドネシアということでメガビジョン撮影は、ファシリテ的に難しい。
 - ・ ワールドカップドイツ大会の映像はやはり見ていて辛い。次に目を向けた夢のあるものに早く切り替えた方がよい。
ジーコジャパンを扱った 2 作品を 1 本にまとめる段階で、未来志向の明るい作品にしていきたい。
 - ・ ヴァーチャルスタジアムを有効活用し、メガビジョンでなくても、試合の放送そのものを何度でも見られるようにできればよい。
 - ・ アジアカップもさることながら、2008 年北京オリンピックは期待も大きいため、北京オリンピックに向けた情報や様子を伝えて欲しい。北京オリンピックをターゲットにすれはうまく盛り上げていけるのではないか。
 - ・ 北京オリンピック予選の著作権や契約はどうなっているのか？
二次予選は JFA に権利があり、扱うのは問題ないと思われる。最終予選は AFC に帰属するため、AFC マーケティング等との別途の契約が必要になる。
 - ・ 著作権なども使用は難しいが、「教育的」であることが認められれば容易に使用できる場合がある。営業行為ではなく、サッカーの競技力向上や普及のため、選手自らが学べる場として、また青少年の教育の場として展開してもよいのではないか。
 - ・ 支出を減らし、コンテンツを増やすことを考えるべきである。
 - ・ 2010 年のワールドカップ南アフリカ大会など将来的なものに関する情報が乏しい。
ワールドカップの情報があれば、南アフリカの国自体の紹介だけでもよい。全体として、過去のものばかりを追っているような印象を受ける。
南アフリカ大会に関してはまだ準備も進んでおらず、ロゴマークさえ正式決定していない状況である。情報が入り次第、ミュージアムでも追加・更新していく予定である。

予算案に関して、遠藤委員より、記念事業補助金について以下の説明が加えられた。

- ・ 記念事業推進委員会は今年度をもって解散の予定である。ミュージアムへの補助金はまだ残額が4億5,000万円ある。これは今後JFAの中で基金として残る。通常であれば運営費の一部を補填しながら使われるのであろうが、(次の議題で話し合う)岡野館長企画案や木村座長企画案のような積極的な活動にいかしてもらいたい。

続いて、事務局より、資料3に基づき、岡野館長企画案である「サポーターと語る」について、実現に向けたスケジュールと運営体制案について説明を行った。

特に、Jリーグの協力なしには実現不可能であることから、Jリーグ事務局を窓口として連携していきたいこと、また、出演者交渉がポイントであることを述べた。現状では、こういった活動において前向きな選手も多いが、特に首都圏のクラブはイベントに多くの選手派遣があり負担がかかり過ぎることに対して、地方のクラブは、宣伝効果が低いためメリットがなく反発も大きい。(「JFA ころのプロジェクト」も同様の問題を抱えている。)各クラブには、映像を貸与し、地域で使ってもらえるような仕組みを考えるなどしてきたい。

なお、本件について、岡野館長より、JFAの川淵キャプテン、Jリーグの鬼武チェアマンは了承済みであることが補足された。

事務局からの説明を受け、以下のような質問と意見をいただいた。(「 」部分は事務局よる回答)

- ・ 2002年のワールドカップの際、世界のトップスターは無償でインタビューに応じてくれた。選手の、いい意味での情熱も必要である。日本サッカー界のための活動として、選手の自主性を重視したい。年間50週として、Jリーグ31チームから多くとも2名ずつ出してもらっただけであると考えれば、難しい話ではない。
- ・ 選手の説得はお金ではなく、心意気である。まずは、やってみることが大事である。
- ・ 地方のクラブの選手が東京に赴くことは、練習や試合、その他クラブの活動が詰まっているため、ほとんど不可能である。そうしたところに対しては、こちらから出向くべきである。
- ・ 地方でなくとも、クラブの状況を見ると、実施は厳しいのではないか。例えば、個人でエージェント契約している選手の取り扱いも難しい。

「JFA ころのプロジェクト」も同様であるが、選手の中には意欲的な者もいる。一方でクラブ側は消極的なところも多い(例えば、ファン感謝デーなどクラブの事業には参加しないのに、ミュージアムには協力するのか、など)。

- ・ インタビュアーの選定が重要である。選手が、「あのであればぜひ対談してみたい」と思えるような人選をすべき。例えば、明石家さんま、現役引退直後の方やコーチになりたての方、岡野館長・・・など。岡野俊一郎氏と話をしたい選手はたくさんいるはず。

- ・ 最初は大物でいき、ステータスを作る。例えば、引退直後の選手(城、井原、福田)、またはベテラン選手(三浦知、中山、中澤、川口)など。
- ・ 進行していけば、積極的なクラブも出てくるし、出演したい選手も現れてくるはずであり、クラブのパブリシティにもつながる。現状、クラブの広報はメディアの対応で手一杯であるが、その壁を突破すれば、流れに乗ることができるのでは。
- ・ インタビュアーは、(後の議題に出てくる)サポーターズ協会でポジションを与え、ボランティアをお願いするなど、公共性を強調し、アウトソースはなるべくしないようにしたい。
- ・ 関係者や選手が拝聴したいと思えるような、プロが勉強できるようなレベルにまでもっていければよい。
- ・ 選手のセカンドキャリアと絡めて行ってはどうか?セカンドキャリアへの情報提供・勉強の場をミュージアムが提供し、その代わりとしてボランティアで協力してもらおうなど。

続いて、木村座長より、資料 4 に基づき、木村座長企画案である「日本サッカーサポーターズ協会」について説明をいただいた。協会設立のポイントは以下の通り。

セカンドキャリア支援の充実

日本代表サポーターの拠点づくり

現状では支援企業のメリットが少ないことの改善

企業、個人のサッカー好きから会費を集め、金額に応じてグレードを設ける。但し、単にお金を積みばよいというわけではなく、人格的な側面も審査したい。身元の保証も重要である。

木村座長からの説明を受け、以下のような質問と意見が交わされた。(「 」部分は事務局よる発言)

- ・ 本来は JFA がやるべきことであるので、別法人を立ち上げる必要はないのではないかと。JFA がミュージアムに一任して、主体的にバックアップする形でなくてはならない。補助金残額の運用も含めて、この点は考慮に入れる必要がある。
JFA が NPO 法人、中間法人を持つことはできない。
- ・ 基金により別予算を作り、集まったものは公に還元して使う、というのが原則である。
- ・ 後援会やサッカーファミリーのチケット登録制度など、既存の代表チームのサポーター組織との関わりはどう考えるのか。
JFA のサッカーファミリー増員策の一環として、サポーターやミュージアム会員の登録制度の案は既に挙がっている。JFA 内のこうした案と統合して考えていきたい。
- ・ JFA の既存の組織と重なるところが多いため、日本サッカー後援会等と組織を統一し、

その本拠地をミュージアムに置けばよいのではないか。

- ・ 代表へのサポートとミュージアムへのサポートは分けて考えた方がよい。ミュージアムへのサポートは、2002年のワールドカップ開催や過去をきちんと伝えることにある。
- ・ 会員のメリットを考える必要がある。
(日本サッカー後援会の現状について説明した。) サッカーファミリーに「サポーター」というカテゴリーを置いた場合、そこに何のメリットを与えられるかは、常に議論的である。
- ・ 会員は歴史を守っていくことを重要視してくれる方であればならない。そのためにも、会員に対してきちんとミュージアムの価値を提示することが必要。有識者グループを作り、有識者からも知識を得られるようにしてはどうか。
- ・ 運営資金を作るために代表チームに頼るということには一考を要する。ミュージアムとしてきちんと理念を持つべきである。
- ・ 代表チームに頼るだけでなく、ミュージアム側もサービスを提供できるはずである。例えばキャリアサポートやコミュニケーションの場の創出など。
- ・ 「サポーター」という言葉の定義が難しく、時に誤解される場合もあるため、慎重に使用したい。

以上の意見交換を踏まえ、木村座長より、本案を、JFAの登録制度や既存の組織と関連付けて位置づける方向で考えたいとのまとめがあった。

次回の会議までに、事務局により、関連する制度や組織の機能を洗い出した上で、再度議論することとした。

最後に、次回のアドバイザリーボードの開催を5月9日(水)午後2時からとし、閉会した。

財団法人 日本サッカー協会
ミュージアム部長 小野沢洋